

平成25年度 多可町ふるさと創造大学 暮らし生き活き科 提言

暮らし生き活き科では、「多可町をトコトン楽しむ」をテーマにカリキュラムを組みました。

第1回講座「心の癒しを求めて」として、雲門寺で座禅修行と青玉神社を訪ねました。座禅は初めての体験の方も多く好評でした。第2回講座「おいしく食べて楽しい暮らし」では、歯の健康を考えました。60歳代では6本以上、70歳代はその倍近く歯を失うという。自分の歯でものを噛みおいしくいただくことの大切さを学びました。第3回講座「杉原紙の歴史を学ぶ」では、杉原紙を使ったもの作り体験として「ランプシェード」を作り、杉原紙語り部の方々から歴史を学習しました。第4回の学外講座は、京都府南丹市美山町の「茅葺きの里を」を訪ねて、ジビエ料理を食し自然の恵みをいただきました。第5回講座は、料理講座「山田錦でお菓子を作ろう」として、山田錦の米粉を使ったケーキやクッキーづくりを楽しみました。第6回講座は、まとめとして一年を振り返って講座生に意見感想を聞きました。

その中で次の2点について提言します。

【1】若い世代や中高年世代が安心・安定して生活できる環境づくりを

今までは、60歳で定年を迎え第2の人生が始まるのが従来の生活スタイルでしたが、今や定年延長や再雇用で働くのが当たり前の時代になっております。65歳からどう生きるか、すでに団塊の世代では始まっている「65歳問題」の始まりです。多可町でも、余生をどう過ごすかが問われております。それと並行して、子供世代、孫世代との付き合い方も重要になってまいります。次の世代が多可町に住んでくれるのか、さらに、親としては同居を望んでいても、近くに住んでくれる事ですら難しい状況です。

今は「住むなら多可町」として、若い世代、子育て世代には、ありとあらゆる施策が講じられています。しかし今後は、高齢化が進み、独居が増えていく中、誰もが「住み続けられる多可町」へ転換していく事が必要ではないでしょうか。

中高年世代が住み続けるためには、やはり収入が必要で有り、また生きがいを持つことが重要です。そこで、例えば、保育ヘルパーや、農業ヘルパー、環境ヘルパーなどの、福祉や安全安心を守る、有償ボランティアを創設してはどうかと提言いたします。シルバー人材センターと競合しない、あくまでも生きがいヘルパーの創設です。みんな（ヘルパー）でワークシェアできる施策を望みます。

【2】多可町の自然資源・農作物を活かした食品づくりを

多可町では、鹿やイノシシなどの野生動物による農作物への被害が甚大です。しかし、ものの見方を変えれば自然資源がたくさんあるということです。今まで「ジビエ料理」の提案はたくさんあり、それなりに実行されているそうですが、企業化しても、ほしい時に生産物が無いなど、消費に結びついていないとは思われません。また、料理教室もされているそうですが、一過性ではなく繰り返し開催し、消費者のニーズにこたえるジビエ料理を作っていただきたいです。また、エーデルささゆりなどの多可町内のレストランで、プロの調理人が認めるおいしい料理が提供され、それが通常メニューに加わることも望みます。もちろん、そのための人材育成は欠かせません。

また、多可町産のお米の美味しさは私たちの誇りです。ごはんそのものは一定の評価を得ていますが、今後の展開として、コシヒカリや山田錦の米粉を使ったパンやケーキの製造が有効と考えます。多可町産の安心安全な米粉を売り込むチャンスと考えます。